

美術館ではオリジナルの短編アニメーションを上映しており、図書室では上映作品に合わせて関連する本を紹介しています。例えば「毛虫のポロ」の上映時には虫や植物に関する本を揃えています。これらは映画の原作本ではありませんが、この映画をきっかけに虫や植物を身近に感じ、様々な世界や生き物にももっともっと親しんでいただけたらと考えています。

先日、上映作品のひとつ「水グモもんもん」にぴったりの本を見つけました。『うまれたよ!ミジンコ』(岩崎書店)です。映画は水グモのもんもんがアメンボのお嬢さんに恋をするお話で、水の中の小さな生き物の世界が描かれています。ザリガニやオタマジャクシ、エビなど多くの水辺の生き物が登場し、その中にミジンコの姿も見られます。映画ではほんの少ししか登場しませんが印象的な存在です。まんまるな黒い目をした小さなミジンコの誕生と成長の様子が、大きな写真で紹介されているこの本を、次の上映時には関連書籍として本棚に並べたいと思います。



季刊トライホークス 2026年 | 83号
 発行日……2026年6月5日 | 発行人……中島清文
 発行所……徳間記念アニメーション文化財団
 東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
 編集……石光紀子 宮村博人 | デザイン……川島弘世
 印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品



山脇百合子の仕事部屋 ごちゃごちゃから見えるもの

「山脇百合子の仕事部屋」展の公式図録がKADOKAWAより刊行されました。サブタイトルに「ごちゃごちゃから見えるもの」とあるように、山脇さんの仕事部屋はたくさんの方たちであふれています。机の上には試し描きのイラストやスタンプ、小さな人形や手紙、ハガキの束、本や辞書などがあり、資料や紙類を入れた段ボールの側面には絵を貼り付け、壁には自ら楽しむために描いた絵が額に入れて飾られています。棚の上にも「ぐりとぐら」の人形をはじめ、おそらく手作りだと思われるぬいぐるみや、ドライフラワーやまつぼっくりなど、細かなものもわんさど置いてあります。まさに“ごちゃ

ごちゃ”、でも愛のある“ごちゃごちゃ”です。部屋にあるのは山脇さんの好きなもの、大切にしているものばかりなのです。

この本では、様々な角度から撮った仕事部屋の写真が掲載されていますので、机の上はもちろん、棚の奥など遠くから見えなかったもの、見きれなかったものをじっくりとご覧いただけと思います。絵を描くのが好きで、仕事だけでなく、生活の中の何気ないものにも絵を描き、色をつけていた山脇さん。仕事が忙しい中で、編み物やパッチワーク、刺繍にステンシルなど、様々なことに興味を持ち、好奇心のアンテナを張り続けていました。美術館の小



山脇百合子の仕事部屋
 ごちゃごちゃから見えるもの
 企画……三鷹の森ジブリ美術館
 スタジオジブリ
 KADOKAWA 2,420円

さな展示室に集められ、紹介されているものたちが、この一冊にまとめられています。ぜひ、すみずみまでご覧いただきたいと思います。

三浦太郎

Taro Miura

読書が苦手な 本屋の息子

絵本作家の三浦太郎さんに紹介していただいたのは洋書の絵本です。アラン・グレは独特な色づかいとデザインで子どもの好奇心を引き出し、ミロスラフ・サセックは都市や文化を軽やかに描いています。日本で刊行されている本もありますので、ぜひその魅力に触れてみてください。



* * * * *

ぼくは本屋の跡取り息子に生まれ、本に囲まれて育ちました。そう言うと、うらやましいと思われるかもしれませんが。けれど、饅頭屋の子が甘いものを好きとは限らず、酒屋の子が酒好きとも限らないのと同じで、身近にありすぎるものは、かえって特別なものとして意識しにくいのかもしれません。ぼくにとって本も、まさにそんな存在でした。あるのが当たり前すぎて、子どものころはなかなか読書が身につきませんでした。それでも両親はよく言います。「あなたには小さいころから、たくさん絵本を読み聞かせたのよ」と。きっとそうだったのだと思います。けれど、不思議なことに、家の部屋には本棚がひとつもありませんでしたし、小学校に上がるまで「これは自分の本だ」と思える本が一冊でもあったかという、どうも記憶があいまいです。絵本作家をしていると、「子どものころ好きだった絵本は何ですか」と聞かれることがよくあります。ところが、ぼくにはそれがなかなか思い浮かびません。もちろん何も読んでいなかったわけではないのですが、「これが原点です」と言える一冊が出てこない。そのたびに少し困ってしまうのです。

そんなぼくにも、自分から進んで開いていた本がありました。それが図鑑です。とにかく図鑑が

好きでした。学研の丸いマークのもの、小学館の黄色い表紙のもの、旺文社や講談社のものまで、見かけるたびに夢中で開いていました。とはいえ、実際には店の本を立ち読みしていたわけですから、大きな声では言えません。中でも特に惹かれたのは、まだ手描きのイラストがたくさん使われていた時代の図鑑でした。電車や車、いろいろな乗り物のページはもちろん好きでしたが、いつまでも飽きずに眺めていたのは、街や港、河川などを描いた鳥瞰図です。上から見下ろすように描かれた風景には、現実とは少し違う、世界を丸ごと手のひらに載せたようなおもしろさがありました。今あらためて思うと、その頃の記憶や興奮は、今自分が作っている絵本の世界と強くつながっているように思います。

その後、小学生になると漫画を読み、中学生ではファッション雑誌、高校生になるとアートやデザインの雑誌に興味を持つようになりました。若いころはポップアートに夢中で、アンディ・ウォーホルのような作品を作りたいと本気で思い、美大を目指しました。今振り返ると、インターネットのない時代に、毎月新しい情報が雑誌という形で自然に入ってくる環境に育ったことは、とても貴重な体験だったと思います。自分では意識していなくても、そうした紙の情報の蓄積が、感覚の

どこかを確実に育ててくれていたのでしょう。

大学を出てすぐにフリーランスのイラストレーターになりました。まだ絵本を一冊も出していなかった20代のころ、海外でアンティークの絵本を買う機会がありました。そこで出会ったのが、カスターマンから出ていたアラン・グレの「Achille et Bergamote (アシールとベルガモット)」シリーズです。見つけた瞬間、初めて見る本のはずなのに、なぜか懐かしさでぞわっとするような感覚がありました。それはたぶん、子どものころ書店の隅で、箱からそっと出して大事に眺めていた図鑑の記憶とつながったのだと思います。あのころの興奮が、ふいに戻ってきたようなうれしさがありました。しかもその本は、なんとも優しく、洒落ていて、印刷の色がじつに美しいのです。とくに60年代のものは紙質もよく、印刷はフラットで、版画のようにも見えます。まだ自分が絵本を作る予感すら持っていなかったころに、今の自分の土台になるような感覚が、すでにそこで形づくられていたのかもしれませんが。そして、ここでもやはり自分は「図鑑的な絵本」に惹かれていたのだと思います。ぼくの絵本が、なかなか物語一本で進むものになっていかないのは、そもそもの好みが大きく影響しているのではないか。そんなふうに自己分析しています。

もう一冊、忘れられないのが、チェコ生まれの作家ミロスラフ・サセックの「This is」シリーズ

です。W.H. Allen版を初めて見たときも、やはりすでに懐かしいものに出会ったような気持ちがありました。さほど細かく描き込んでいるわけではないのに、なぜか写真よりもリアルに感じられる。不思議な説得力がありました。遠い異国の街の空気や旅情を想像しながら、のんびりページをめくるには、これ以上ない絵本ではないかと思います。多くのイラストレーターがこのタッチに憧れ、手本にしてきた理由もよくわかります。

気がつけば50代になり、今また小さいころのように本に囲まれて暮らしています。あのころと違うのは、本がただ「ある」のではなく、一冊一冊にちゃんと目が向くようになったことかもしれません。本の魅力は、年齢を重ねるほどに、むしろ深くなっていくようです。結局のところ、ぼくもまた、今なお本に取りつかれている一人なのだと思います。

みうら たろう

1968年愛知県生まれ。大阪芸術大学美術学科卒業。ポロニー国際絵本原画展で入選を重ね、海外で絵本デビュー。日本では、絵本『くっついた』(こぐま社)が140万部を超えるヒットとなった。『ちいさなおうさま』(偕成社)で産経児童出版文化賞 美術賞。現在、女子美術大学特別招聘教授。



トライ
ボックス
の本

くっついた
作…三浦太郎
こぐま社 880円



l'eau(水)
作…Alain Grée
CASTERMAN
◇「アシールとベルガモット」
シリーズより



ジス・イズ・
ニューヨーク 復刻版*
作…ミロスラフ・サセック
訳…松浦弥太郎
スペースシャワーネットワーク
絶版



きこえる!きこえる!*

言葉…アン・ランド
絵…ポール・ランド
訳…谷川俊太郎
集英社 絶版



たんじょうび
おめでとう!*

作…
マーガレット・ワイズ・ブラウン
絵…レナード・ワイズガード
訳…小宮 由
好学社 1,760円

ポール・ランド、
マーガレット・ワイズ・ブラウン、
レナード・ワイズガードも、
三浦さんが古書を通じて
出会い、好きになった
作家だそうです。

*印の書籍は、
三浦さんが挙げた
書籍タイトルや
作家名をもとに、
日本で刊行された
本の中から編集が
選ばれました。



本を読むきっかけ

久しぶりに読み返そうと思って手に取ったローラ・インガルス・ワイルダーの「小さな家シリーズ」。既読の本をもう一度読もうと思うきっかけは、「好きな本だから」や「誰かがおすすめしていたから」など、いろいろとあると思います。今回のきっかけは、山脇百合子さんの本棚にこのシリーズの原書が並んでいたことでした。

もともと図書館では第1巻の『大きな森の小さな家』を、宮崎駿監督のおすすめの本として開室当初から所蔵しています。さらに、シリーズ6巻目の『長い冬』は、宮崎監督が選んだ岩波少年文庫の50冊を紹介する『本へのとびら』（岩波新書）でも取り上げられており、この季刊トライホークスでも、たびたび紹介してきました。

山脇さんはこのシリーズを、日本語だけでなく英語版の原書でも読んでみたいと、ご主人のアメリカ出張の際に買い求めてもらったそうです。山脇さんが「原書でも読みた

い」と思うほど心惹かれた本だと知り、私自身が改めて読みかえたいと思いました。そして、この季刊トライホークスでもご紹介することで、このシリーズを手にとっていただくきっかけになればと思います。

この物語は、今から100年以上前、アメリカのウィスコンシン州に生まれた作者が、60代になって自分の子ども時代を思い出し書き上げたお話です。当時のアメリカは西部開拓が盛んに行われていました。人々は家族とともに馬車で移動し、未開の地で土地を切り開き、畑を作り、家や家具も何もかも、自分たちの手で作りながら暮らしていました。この物語では、主人公ローラが家族とともに大きな森や大草原を旅し、やがて結婚して家庭を築くまでが全10巻にわたって描かれています。アメリカでテレビドラマ化され、日本では1975年に「大草原の小さな家」というタイトルでNHKにて放映されました。何度も再放送されているので、ドラマで親しんだ方も多いのではないのでしょうか。どこまでも広がる草原や野に咲く花々、お父さんが弾くヴァイオリンを家族で聞くと、そんな温かな場面を思い浮かべる方も多いかもしれません。今ある便利なものは何ひとつない時代ですが、家族は力を合わせ、季節ごとの行事を楽しみながら日々を重ねていきます。主人公ローラの目を通して、当時の暮らしの息づかいがいきいきと伝わってくる、そんな物語です。

小さな家シリーズ 全10巻

作…ローラ・インガルス・ワイルダー
画…ガース・ウィリアムズ



1 大きな森の小さな家

訳…恩地三保子
福音館文庫 660円

- 2 大草原の小さな家
- 3 プラム・クリークの土手で
- 4 シルバー・レイクの岸辺で
- 5 農場の少年

福音館文庫 各825円



6 長い冬

訳…谷口由美子
岩波少年文庫 990円

- 7 大草原の小さな町
- 8 この楽しい日々
- 9 はじめの四年間
- 10 わが家への道 ローラの旅日記

岩波少年文庫
7 990円 8 968円
9 748円 10 品切重版未定

「小さな家シリーズ」全10巻は、前半の5巻は福音館書店、続く後半の5巻は岩波書店から出版されています。森や大草原での暮らしや町での日々、姉メアリの失明、ローラが選んだ仕事のことなど、19世紀後半のアメリカ開拓時代を生きた家族の物語です。シリーズを通してローラ一家の歩みが描かれていますが、5巻『農場の少年』は、後にローラの夫となるアルマンゾの少年時代を描いた作品です。それぞれの巻が独立した物語として楽しむことができます。